

小学校教員養成課程学生の教員への意欲の変容とその要因 — T大学の学生を対象に —

山口 佳代・福田 啓子
(平成28年1月14日査読受理日)

A study on the motivation of the students in the training course for a teacher's license

YAMAGUCHI, Kayo FUKUDA, Keiko
(Accepted for publication 14 January 2016)

キーワード：教育実習，教員養成，キャリア形成支援

Key words：Teaching Practice, teacher training, Support for career development

1 はじめに

教員養成課程を履修する多くの学生は、入学時から教職に就くことを目指し、教職の専門知識や技術を学び、将来の教員としてのキャリアを形成していく。しかし、最終的な職業決定に至るまでには、予期せぬ出来事や結果に遭遇することもある。自分の描いていた教員像、教育観とは異なる現実に戸惑ったり、教員への適性に悩んだり、迷いや葛藤が生じることもあるだろう。また、教職に就くことを強く望んでいても、教員採用試験結果等、満足した結果が約束されているわけではない。教職とは異なった職業の選択や再度教職への挑戦を選択する学生もいる。

文部科学省によると、「2014年度の国立の教員養成大学・学部（教員養成課程）卒業者の教員就職率」は、60.4%（前年度より0.9%減）となっている。¹⁾この状況は、現在の教員需給や就職難的な問題ばかりではなく、教員養成課程における指導内容や指導方法等における問題や課題を内包しているとも言えるだろう。つまり、学生の教職への意欲の持続や動機付けという観点から、学生の教員としてのキャリアを十分に積み上げ、さらに将来それらが発揮できるような支援環境を考えていかななくてはならないだろう。

本報告は、T大学小学校教員養成課程を履修する学生を対象に、「小学校教員になりたい」気持ちや意欲の変化およびその要因を調査し、その分析結果と学生が最終的に選択した職業との関連性を見ることによって、そこに付随する問題点を明らかにし、小学校教員養成に関わる一人として、今後の学生へのキャリア支援、就労支援を促進していくための示唆を得ようとするものである。

学生が職業を決定するという過程には、様々な条件が生

じるが、それらを学生自身がどのように捉えていくかは、将来に向けての大きなターニングポイントとなるだろう。現実を客観的に把握できる能力が必要であることと同時にその支援の必要性を痛感している。今回は、大学4年生に向けた調査内容から、小学校教員への意欲の変化と要因を考察することによって、今後の研究の手がかりとしていきたい。尚、T大学児童教育学科の学生は、小学校教員免許の他に、幼稚園教諭一種免許状か中学校教諭二種免許状(英語)のどちらかを選択で取得することができるが、今回は、小学校教員への職業決定ということに特化した調査であり、考察を行うものである。

2 調査方法

(1) 調査対象

T大学 児童教育学科 小学校教員免許状取得希望者
4年生99名(無回答4名含む)

(2) 実施期間

平成27年1月～3月

大学における授業終了後に、調査用紙を配布し、職業決定後に順次回収した。

(3) 調査内容

問1 4年間における「小学校教員への意欲」の変化について、入学時から1年生、2年生、3年生、4年生の各前期・後期において、小学校教員へ就きたい意欲がどの程度であったかを、「とても就きたかった」、「やや就きたかった」、「どちらとも言えなかった」、「あまり就きたくなかった」、「他の職業を考えていた」の5項目から選択する。

問2 「小学校教員への意欲」に変化のあった学生には、そのきっかけとなったことについて、「a. 小学校

教育実習], 「b. 大学の授業」, 「c. 両親や兄弟の影響」, 「d. 友人の影響」, 「e. テレビやインターネットなどのメディア」, 「f. 幼稚園教育実習」, 「g. 中学校教育実習」, 「h. その他」の項目から選択する。(複数回答可)

問3 「職業選択」において、影響の大きかった出来事や解決策などを自由に記述。

問4 自己の職業決定を振り返り、後輩や、大学の指導に対し意見を自由に記述。

問5 卒業後の進路

(4) 分析方法

① 小学校教員への意欲の程度を「とても就きたかった」を5, 「やや就きたかった」を4, 「どちらとも言えなかった」を3, 「あまり就きたくなかった」を2, 「他の職業を考えていた」を1とし、5段階に数値化した。

② 5段階の値を個人別、学年別(前・後期)に集計した。

③ 集計表から各学年の入学時から卒業時までの4年間の意欲の変化を次のように5つのパターンに分類した。

Aパターン：入学時の値から下降現象がみられ、4年生にはその最低値より高くなっている。

Bパターン：入学時の値より上昇し、4年生に最高値になる。

Cパターン：入学時の値より下降し、4年生に最低値になる。

Dパターン：入学時の値から上昇し4年生にはその最高値より低くなっている。

Eパターン：入学時から一貫して値の変化がなかった。

④ 大学4年間に変化が見られた73名の学生の要因について、項目別にその人数と割合を算出した。

⑤ 自由記述は変化の要因と関連性のある内容を検出した。

⑥ 上記の結果を就業先との関連から検討した。

3 結果および考察

(1) 全体的特徴

図1は、入学時の「小学校教員への意欲」の程度を回答のあった学生(95名)の構成割合で示したものである。入学時では、「とても就きたかった」28人(29.5%)と「やや就きたかった」37人(38.9%)、両者を合わせると65人(68.4%)となり、半数以上の学生が小学校教員に就くことを考えているということになる。また、「どちらとも言えなかった」16人(16.8%)、「あまり就きたくなかった」2人(2.1%)、「他の職業を考えていた」12人(12.6%)と将来小学校教員に就くことを迷っている学生や、その他の職業を目指している学生が合わせて30人(31.5%)となっている。

図2は、小学校教員への意欲の変化を先に述べた分析方法により分類し、各パターンの特徴を図化したものである。

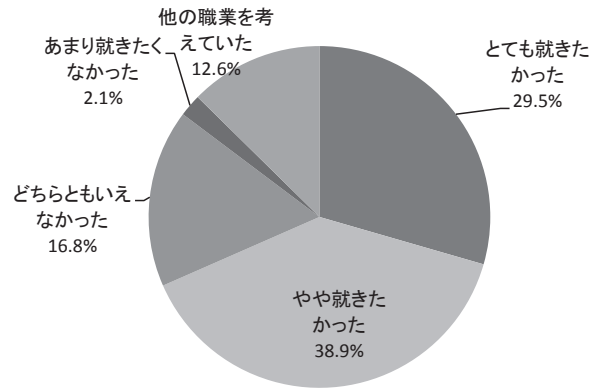


図1 入学時の小学校教員志望度

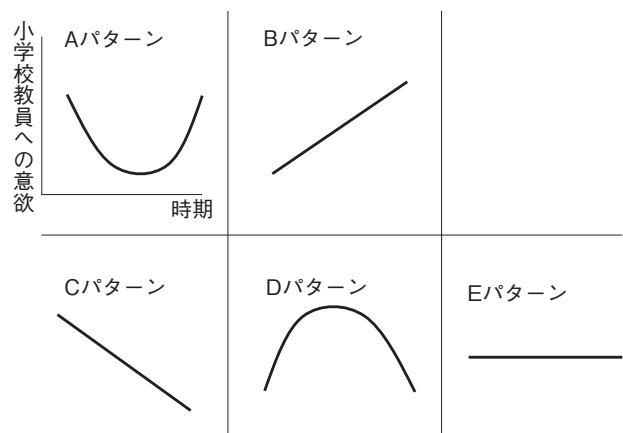


図2 変化のパターン

各パターンの横軸は4年間の時期、縦軸は小学校教員への意欲を数値化したものとした。

また、図3はパターン別に回答のあった学生(95名)の構成割合を示したものであり、Aパターン「下降するが再び上昇」23人(24.2%)、Bパターン「上昇」20人(21.1%)、Cパターン「下降」17人(17.9%)、Dパターン「上昇するが再び下降」13人(13.7%)、Eパターン「変化なし」22人(23.2%)となっている。ここでは入学時から数値の上昇がみられるA、Bパターンの人数が下降傾向のC、Dパターンより多く見られた。また、Eパターンの人数は、22人であるが、そのうち18人が「とても就きたかった」を選択している。

T大学児童教育学科小学校教員養成課程の学生は、入学時の小学校教員志望度は比較的高く、将来の職業として、高校時から、すでに小学校教員を選択している学生が多い。しかしその反面、教職への意思がなく入学した学生を含む、自己の職業の方向性が定まらない学生もいることも見逃してはならない結果である。T大学児童教育学科は幼稚園教諭一種免許状、または中学校教諭二種免許状を取得できるため入学時から中学校や幼稚園への進路を選択していることも考えられる。

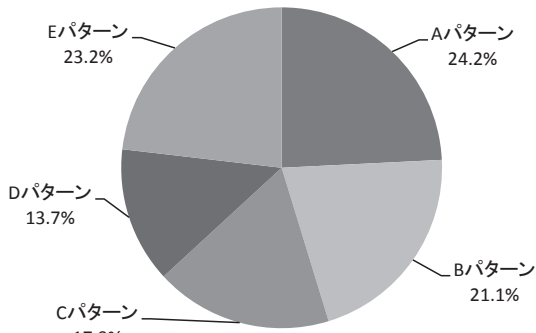


図3 変化のパターン

(2) 変化の要因

入学時から卒業時までに、小学校教員志望度に何らかの変化が見られた学生（95名中73名）の職業決定に影響を及ぼした要因を見ていく。

図4は、職業決定に影響を及ぼした要因の割合について表したものである。ここでは、最も多かった要因が、「a. 小学校の教育実習」31人（42.5%）である。次いで、「b. 大学の授業」26人（35.6%）、「f. 幼稚園の教育実習」19人（26%）、「c. 両親や兄弟の影響」8人（11.0%）、「d. 友人の影響」5人（6.8%）、「e. テレビやインターネットなどのメディア」5人（6.8%）、「g. 中学校の教育実習」2人（2.7%）、「その他」18人（24.7%）となっている。

T大学児童教育学科の学生は小学校の教育実習を4年生前期、幼稚園教育実習を3年生後期、中学校教育実習を4年生後期に実施する。特に小学校、幼稚園教育実習の前後では、教職に対する考えにも変化が見られることから、幼稚園教育実習も要因の一つとして影響を及ぼしているだろう。また、教員養成課程における「大学の授業」は教職に直結している内容であることから職業決定要因としての影響も大きいと考えられる。

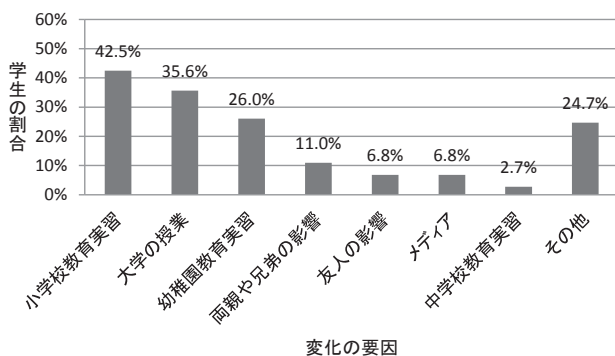


図4 職業決定に影響を及ぼした変化の要因

(3) パターン別特徴

ここでは各パターン別に要因との関連性を見ていく。

① Aパターンについて

図5は、Aパターンが見られた学生23名の小学校教員

への意欲の程度（5～1）の平均値を表したものである。特徴としては、入学時には、4.1と高い値を示していたが徐々に下降し、2年生後期には、2.9と最低値になっている。その後、上昇し、4年生では、4.6と入学時の値を越えていることである。

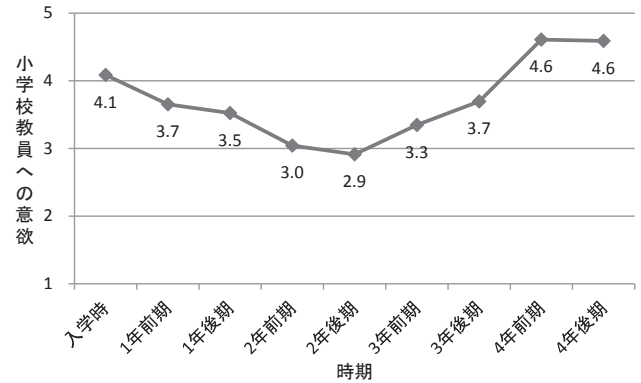


図5 Aパターンの平均値

図6は、Aパターンの学生の小学校教員への意欲に影響を及ぼしたと思われる要因を割合で表したものである。最も選択した学生が多かった要因は「a. 小学校教育実習」の11人（47.8%）であった。次いで「f. 幼稚園教育実習」7人（30.4%）、「b. 大学の授業」6人（26.1%）となった。

また、これらの結果では3年生から4年生の前期にかけて小学校教員への意欲が高まっていることがわかる。小学校教育実習での体験がより小学校教員への意欲を確実なものにした原因のひとつともいえるだろう。3年生後期の幼稚園教育実習が要因として多くあげられたのは、幼稚園教員より小学校教員が適任と思われた結果ともとらえられる。学生の具体的な記述では、「大学に入学し3年生の半ばまで幼稚園教諭を希望していたが小学校の教育実習を通して小学校教諭を志望するようになった。小学校教諭になるための対策はほとんどしていないのと同じだったため悩んだが、できる限りのことをした。運よく合格することができたため小学校の教諭になった。」といった内容だった。入学時から1、2年生においては教職の基本的概論だけではなく現場での実体験を取り入れた大学での授業を積極的に取り入れた早期の動機づけや進路対策が望まれる。

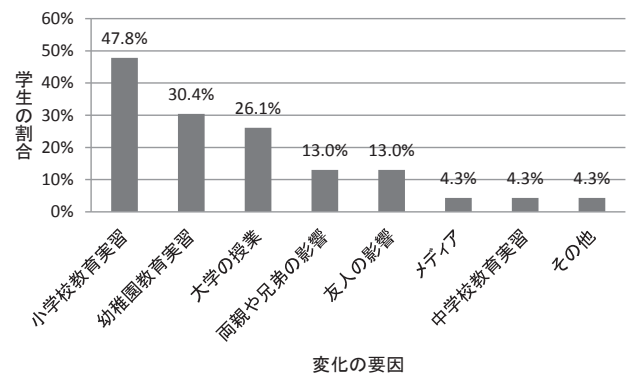


図6 Aパターン 変化の要因

② Bパターン

図7は、Bパターン（上昇傾向）を描いた学生20名の平均値を示したものである。入学時において3.1から、4年生前期まで上昇傾向がみられるが、4年生後期にはわずかに下がっていることがわかる。

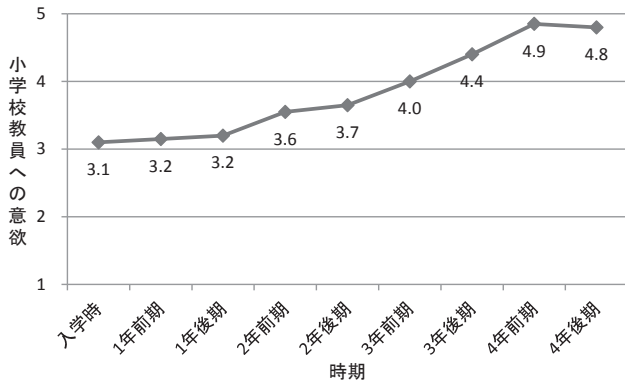


図7 Bパターンの平均値

図8は、Bパターンの学生の小学校教員への意欲に影響を及ぼしたと思われる要因を割合で表したものである。変化の要因として「a. 小学校教育実習」を選択した学生は9人（45.0%）と最も多くみられ、2番目に「b. 大学の授業」6人（30.0%）となった。また「f. 幼稚園教育実習」を選択した学生は2人（10.0%）となり73名全体の図（図4）の「f. 幼稚園教育実習」19人（26%）と比較し大幅に割合が少ない結果となった。

また、「h. その他」の具体的な内容の記述をみると、「小学校教諭を目指そうと考えたのはボランティアを通して実際の教育現場をみたことである。」といった内容や「ボランティア等で実際に小学生と触れ合うことで、よりその思いが強くなりました。」といった内容の記述が見られた。教育実習、ボランティア等実際の現場を体験することによって小学校教員への意欲が高くなったと読み取ることができる。また、大学の授業が意欲を高めていることも含めて、大学生生活の早い段階での、小学校現場経験や実習がその後の小学校教員志望度に大きな影響を与えることになるともいえるだろう。

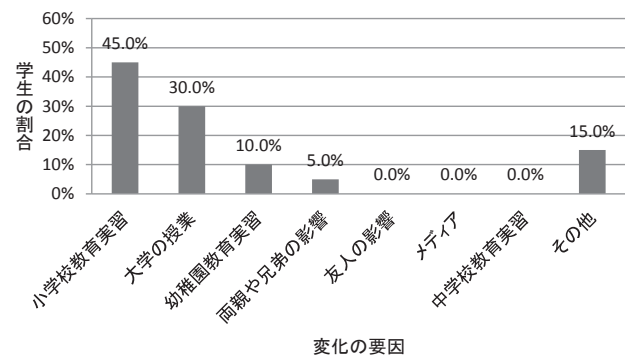


図8 Bパターン 変化の要因

図9-(1) および図9-(2)は、入学時より4年生に意欲が高くなったAパターンとBパターンの就職先の構成割合である。両パターンとも小学校教員になった人数が多くみられる。特にBパターンは入学時の迷いがあったものの8割が小学校教員となっている。その要因となる「大学での授業」は専門職として事前知識の修得が影響しているともいえるだろう。

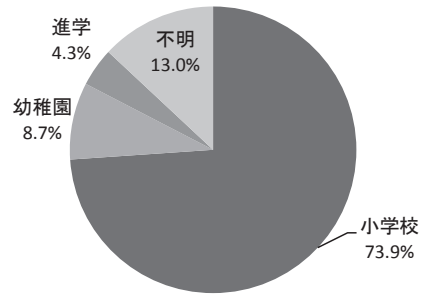


図9-(1) 就職先 (Aパターン)

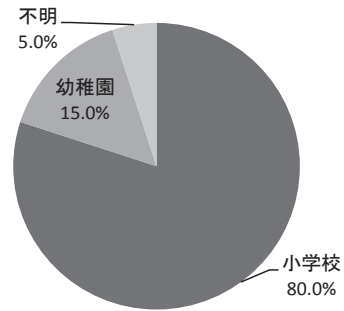


図9-(2) 就職先 (Bパターン)

③ Cパターン

図10は、Cパターンの学生（17名）の平均値を表したものである。入学時に4.1と比較的高い値から徐々に下降し、4年生前期にわずかに上昇するものの、後期では、さらに1.6まで低くなっている。

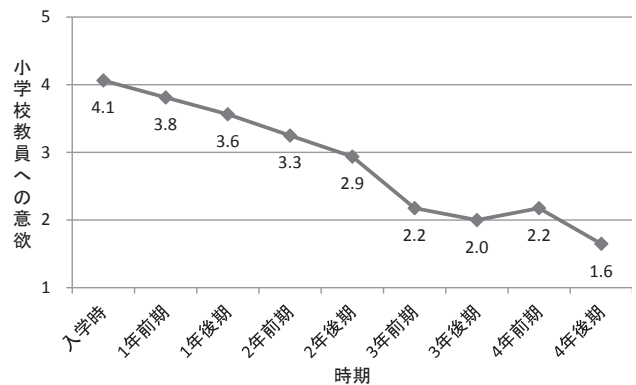


図10 Cパターンの平均値

図 11 は、C パターンの学生の小学校教員への意欲に影響を及ぼしたと思われる要因を割合で表したものである。ここでの特徴は、減少していく過程で、「b. 大学の授業」の影響が大きいのではないかとということと、「h. その他」の項目を選択した学生は 9 人 (52.9%) と要因の中で最も人数が多くなったことである。

具体的な記述をみてみると「大学の授業を受けてくつれ小学校教師の厳しさを知り、自分に小学校教師ができるのか不安になりほかの職業を考え始めた」といったものが挙げられた。また「その他」では、ボランティア、塾のアルバイト、インターンシップ等があげられ、「大学の授業を受けていくうちに自分にはむいてないのではないかと迷った。その際に背中をおしてくれたのが先輩方の話だった」といった内容がみられた。C パターンの下降要因として考えられるのが「大学の授業」である。専門職としての動機づけとしての授業は自己の適性を認識するという重要な要素をもっていることになるであろう。

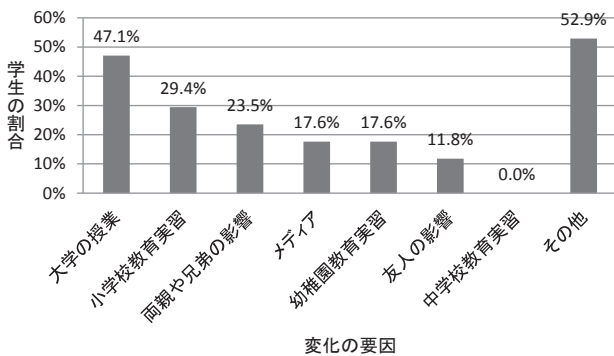


図 11 Cパターン 変化の要因

④ D パターン

図 12 は、D パターンの平均値を表したものである。入学時の 2.0 から 3 年生まで 3.3 と徐々に上昇するが、その後下降し、4 年生後期では最低値 1.8 を示している。

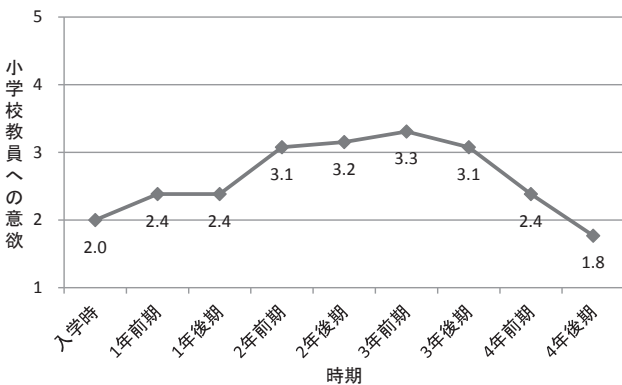


図 12 Dパターンの平均値

図 13 は D パターンの学生の小学校教員への意欲に影響を及ぼしたと思われる要因を割合で表したものである。図 13 の D パターンの要因で特徴的なのは「f. 幼稚園教育実習」7 人 (53.8%), 「a. 小学校教育実習」6 人 (46.2%), 「b. 大学の授業」6 人 (46.2%) の割合が高く、「h. その他」5 人 (38.5%) となっていることである。

小学校教員に就くことはあまり考えてはいなかったが、ここでも大学の授業を受けることにより、意欲が徐々に高まっていったのではないと思われる。しかし、幼稚園教育実習を境に値が低くなり、小学校教育実習でさらに値が下がっていることを考えると、両教育実習が小学校教員への意欲を低くさせている原因と考えられるだろう。具体的な記述をみてみると、「幼稚園教育実習と小学校で迷っていました。幼稚園での実習やボランティアを通して幼児たちと関わっていきたくて思いました。」といった内容が見られた。また、「小学校の教育実習は楽しく、多くのことを学べたが、仕事量の多さなどを目のあたりにした」「小学校での教員間の関わり」等、小学校教育実習が意欲を下げる要因となっていることがわかる。

入学時より 4 年生に意欲が低くなった C パターンと D パターンの就職先を見ると、当然ながら、両パターンとも小学校教員に就いた学生の割合は少ない。

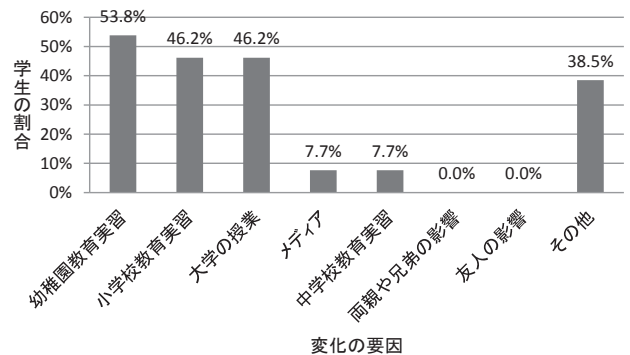


図 13 Dパターン 変化の要因の割合

図 14- (1) および図 14- (2) は入学時より 4 年生に意欲が低くなった C パターンと D パターンの就職先の構成割合

C パターンに関しては、2 年生後期から 3 年生にかけて小学校教員への意欲が大きく下がっていることがわかり、そのため小学校・幼稚園の両教育実習を行う以前に、教職以外の職業を選択し、最終的に一般企業への就職した割合が多くなったと考えられる。入学時における小学校教員への意欲が 4.1 と高かったのに対し、学年ごとに教職への意欲が下がっていく実態を考えると、最も職業支援の検討すべき事項が残されているパターンといえる。

D パターンに関しては入学時の意欲があまり高くないこ

と、また、意識変化のカーブも値があまりあがらず緩やかなことから小学校教員への意欲が4年間を通して低かったといえる。また、幼稚園教員に就いた学生が比較的多いのは、入学時に幼稚園教員志望だったことも要因の一つだろう。

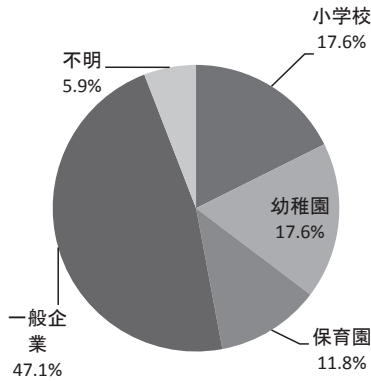


図 14 - (1) 就職先 (Cパターン)

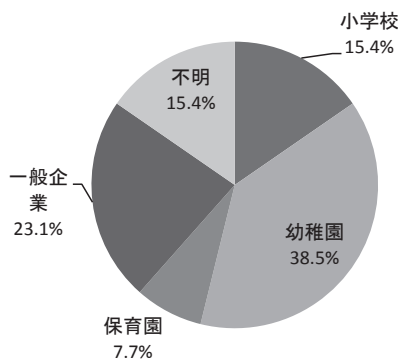


図 14 - (2) 就職先 (Dパターン)

⑤ Eパターン

Eパターンは、入学時から卒業時まで一貫して意欲の変化が見られなかった22人である。そのうち「とても就きたかった」を保った学生が、18人いて、うち16人は小学校教員となった。「やや就きたかった」は2人、「あまり就きたくなかった」、「他の職業を考えていた」で各1人、合計22人であった。

Eパターンは今回の変化の分析対象外ではあったが、変化がなかった要因というものもあったのではないかと今後、検討すべき新たな示唆を与えてくれた。

4 まとめと今後の課題

以上、小学校教員養成課程を履修する学生を対象に、教職に対する意欲の変容とその要因について、主として「小学校教員」という観点から調査を行い、その結果を述べてきた。

大学4年間に「小学校教員」を目指すことへの意欲や意

識に変化が見られた学生は、全体の8割であった。その変化の傾向として次のことがわかった。一つ目は「小学校教員への意欲」の変化は、5つのパターンに分類することができた。二つ目は「小学校教員への意欲」が上昇傾向を示すのは、4年生前期、続いて3年生の後期、逆に下降傾向を示すのは、2年生後期、3年生前期、そして4年生の後期に多く見られた、ということである。

また、変化の要因については、「小学校教育実習」を選択した学生が最も多く見られ、次いで、「大学の授業」「幼稚園教育実習」となっている。

上記の変化のパターンと要因を小学校教員への意欲に変化が見られた時期との関連で見ると、まず、4年生前期の「小学校教育実習」での体験は、職種決定の重要な要因であることがわかる。意欲が高くなった学生にとっては、小学校教員としてのやりがい、充実感が新たな意欲へと変化したものとみられる。しかし、一方で「小学校教育実習」は、意欲の低下にも影響を与えていることがわかる。現実の教育現場を体験し、自己の適任性や能力の不安、自信喪失等を感じている学生も少なくない。さらに、4年生のこの時期は、教員採用試験があり、その結果も個人の職業選択には、影響が大きいものとなる。

「大学の授業」については、教職を目指す学生にとって専門科目や演習等の授業を通して、新たな知識や技術を学ぶことによって一層、小学校教員への意欲が高まるものと思われる。一方、既に教職を目指さないことを決定している学生、迷っている学生には、意欲の低下要因となっている。同様に、「幼稚園教育実習」も小学校教員への意欲の上昇、下降の両者の要因になっていることがわかる。

変化要因の「その他」では、学外活動における体験や他者からの意見、アドバイスが多く見られ、小学校教諭としての自分の適格性、他の就職先などを考えるきっかけともなっている。特に、教職を選択しない学生にとって顕著にみられた要因である。

小学校教員養成課程においては、小学校教員を目指す学生の意識を高めるためにも以前にも増してよりよい環境と体制の可能性を模索していかなくてはならない。入学時から早い時期に、教職への動機づけ体制が望まれる。そして、同時に小学校教員という職業に迷いを持っている学生、進路変更を考えている学生にとっても自分の将来のキャリアと結びついて考えられるような知識やアドバイスを提供でききる機会や場所を設定していくことも必要である。どちらにも共通して考えられるのは、教職員の協力、他部署との連携が何より重要であると思われる。

近年、教員養成課程においては、キャリア形成のための専門授業やカリキュラム構成の見直しが求められ、今後、さらに必要性が増すと考えられる。今後の課題としては、教員養成課程履修学生に対して、調査対象の拡大と年度別

の比較を行い、今回行った結果と合わせて検討していきたい。

今回の調査報告は2015年国際キャリア教育学会日本大会において発表したものに加筆したものである。

註

- 1) 文部科学省：国立の教員養成大学・学部（教員養成課程）の平成26年3月卒業者の就職状況等について、
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/27/01/1354711.htm (2015.9.30 参照)

参考文献

- 1) 岩本俊郎・浪本勝年・大津悦夫 (2012) 「新教育実習を考える」北樹出版
- 2) 石橋裕子・梅澤実・生野金三・生野桂子・林幸範 (2011)

「小学校教育実習 Q & A99」萌文書林

- 3) 山崎保寿 (2013) 「キャリア教育の基礎、基本」学事出版
- 4) リンクアンドモチベーション (2015) 「就職活動の新しい教科書」日本能率協会マネジメントセンター
- 5) 福田啓子 (2010) 「小学校教育実習における現状と展望Ⅲ」東京家政大学研究紀要, 第50集 (1), pp71-77
- 6) 秋光恵子 (2011) 「教育実習経験が教師に必要な資質能力に関する自信と教師志望度に及ぼす影響」兵庫教育大学学校教育学研究, 第23巻, pp43-52

謝 辞

研究当初より多大なご協力とご支援を頂き、今回の調査報告にあたりまして貴重なアドバイスを頂きました伊東久美子先生（元職業能力開発総合大学校東京校）に心より感謝申し上げます。

Abstract

It is important for a student to find his or her future career during their school days. Therefore, the importance of the special classes and curriculum for their skill development will be very high, especially in universities which train students who aim to become school teachers.

The objective of this study was to propose a method of enhancing the motivation of students in the training course for a teacher's license.

A questionnaire survey was conducted with students who were studying for teacher's license. They were asked to rate their level of motivation to be a teacher when they had been a first, second, third and fourth year student. Their answers were then analyzed to find the factors which influenced their level of motivation, and their occupation after graduation.

The steps of the investigation can be itemized as follows.

1. Investigate changes in the students' rate of motivation during the four years of their studies.
2. Investigate some factors which either raised or lowered their motivation during that time.
3. In the case of a students who chose an occupation other than a teacher, we investigated which factors influenced his or her decision.

The results of our study are summarized as follows.

1 The changes in the rate of motivation during the four years are categorized into five typical patterns.

① Compared to the rate when entering the school, their level of motivation decreased during their early years of study, then increased later on.

② Compared to the rate when entering the school, their level of motivation continually increased.

③ Compared to the rate when entering the school, their level of motivation continually decreased.

④ Compared to the rate when entering the school, their level of motivation increased during their early years of study, then decreased later on.

⑤ Compared to the rate when entering the school, the level of motivation stayed the same.

2 The factors which raise or lower student' motivation are 'on-the-job-training in an elementary school', 'school lessons', and 'activities outside the university'. These factors both raise and lower motivation.

3 It is suggested that career formation or jobhunting is implemented for students whose motivation begins to decline during the training course. It is necessary to support the students keep their motivation high.